

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 9 日現在

機関番号：15401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25590243

研究課題名(和文)子どもの自尊心の国際比較から解く、生きる力・いじめ・学校教育への示唆

研究課題名(英文)Comparative study of student-self-esteem: Implications for zest for living, school bullying and school education

研究代表者

櫻井 里穂 (SAKURAI, Riho)

広島大学・教育開発国際協力研究センター・准教授

研究者番号：50509354

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、アフリカ・アジア(日本を含む)の中学生を対象にして、子どもの自尊心の形成過程、「いじめ」との関連性および学校教育への影響を検証することを目的としたものである。とくに、いじめの加害者側および被害者側の自尊心について男女差や国際比較で差がみられるかどうかを検証した。結果、調査国すべてで男子の方がいじめの加担者になる場合も被害者になる場合も多かった。また、多くの国でいじめに関わっている(加害・被害含めて)生徒の方が、いじめに関わっていない生徒より自尊心が低かった。

研究成果の概要(英文)：The major purpose of this study is to understand how student self-esteem has been promoted at school and how it relates to bullying or being bullied in African and Asian countries, including Japan. Specifically, the study compares whether there are differences between genders or among countries. Male students were found to be more likely to have bullied or been bullied than female students across countries. In all countries, self-esteem was also found to be higher for students who were not exposed to bullying compared to those who were.

研究分野：教育社会学

キーワード：Self-Esteem bullying lower secondary students comparative study

1. 研究開始当初の背景

近年、自尊心、幸福感や QOL(人生の質)などの研究からも、自尊心が高まると幸福感や人生満足度が増すことが実証されている(Oishi 2000; 子安ほか 2012)。しかし、幸福感研究は大学生以上の大人を対象としたものがほとんどで、子どもに注目した比較研究は限られている(UNICEF 2007; 櫻井 2009)。従って、最も多感な時期とされる中学生(原ほか 2006)の自尊心の持つ意味の多面的な検証は喫緊の課題である。

また、日本で近年、社会問題化しているいじめや子どものストレスの問題は先進諸国だけの課題ではない。「2015 年までに良質な初等教育の完全普及(EFA)」の取り組みで、最貧地域であるサハラ以南のアフリカでも初等教育が普及した。その反面、たとえばケニアでは、学校教育は試験勉強中心と変容し(澤村 2012)、いじめも散見されている(櫻井インタビュー 2011)。一方、途上国の多くの子どもたちは先進国では否定される労働から「自尊心」を得ていることも多い(Liebel 2003)。そもそも「自尊心」とはどのように形成されるのか。

学校文化に影響を及ぼす諸要因については、生徒文化論から見た教育学の研究が多々行われている(c.f. 耳塚 1980)。しかし、生徒の心理面(特に自尊感情)から見た、知・徳・体の「生きる力」や学校文化への影響に関しての研究はほとんどなされていない。従って本研究では途上国との比較から「自尊心」の持つ今日的な意義を明らかにする。

2. 研究の目的

本研究は、子どもの「自尊心」に注目し、その形成過程と影響を検証し、異なる社会での共通点と非共通点を分析しその与える意味を検証するものである。特に、アフリカ・アジアの事例から子どもの自尊心の形成過程と「いじめ」や家庭・地域との関係性や、学校教育への影響を検証する。本研究は、比較教育・教育開発・心理学の融合研究であり、特に、以下3点を研究骨子とする。

- (1) 途上国と先進国の様々な社会において、子どもの自尊心が培われる背景・要因は何か。
- (2) 自尊心は「いじめ」にどう影響するのか。男女差はあるのか。国ごとに違いはあるのか。
- (3) 自尊心は、学校や勉強、友達、家庭や地域などと関係があるのか。

3. 研究の方法

本研究では、主にアフリカ(ケニア)・アジア(ブータン・日本)の初等・前期中等

学校において、子どもの自尊心といじめの関係、家庭や地域とどのような関連性があるかを、質問紙調査(悉皆調査)とインタビューを中心に調査する。結果は統計分析する。

(2) 管理職を含めた教員には、子どもの自尊心を育むことと「生きる力」や「いじめ」の関連性について、生徒の質問紙調査の結果を踏まえて、個別にインタビューを行う。

4. 研究成果

本研究は中学生の子どもたちの自尊感情について、その形成過程や家庭・地域の影響、そして、いじめとの関連性について検証する国際比較教育調査である。本来、ブータン・ケニア・日本の3カ国での調査を予定していたが、メキシコでも一部パイロット調査を行うことができた。以下に調査結果の要旨を述べる。

まず、いじめについては、いじめの加害・被害ともに男子の方が女子より経験値が高かった。これは、多くの文献が示している結果と同じであり、本研究でも、おおむねどの国でも男子の方がいじめの加害・被害の経験値が高かった。また、いじめの加害者は被害者にもなる可能性が高く(中程度の正の相関あり)、その逆も同じであること、これもどの国でも同じ結果(有意な相関)が見られた。

「友達」関係が良好なことは、「学校」が楽しいと思えることに有意に影響しており、中学生の子どもたちにとって友達関係が大切なことが本研究のすべての国で明らかになった。

ケニアやブータンにおいては、「(生徒が)労働(時に、お手伝い)に対して誇りを持つこと」は、生徒自身の自尊感情に肯定的な影響があった。

日本では、地方政令都市にある公立中学校において複数年に渡り2回調査を行うことができた。特筆すべき事項としては、以下の4点がある。

- (1) いじめの被害者および加害者は、いじめに関係していない生徒よりも自尊心が低かった。これは、いじめる側の子どもの自尊心が高いとした本間(2003)の結果とは異なる結果となった。2度の調査ともに同様の結果であった。
- (2) 女子の方が男子よりも自尊心に対する自己評価は低いものの、家庭や友達に対する満足度が高かった。これも、2回の調査で同じ結果であった。
- (3) 生徒の自尊心に最も強い影響を与え

るものは「勉強（が好きで、授業が良く分かる）」であった。その次が、「家庭」であった。これは、男女ともに同じで、さらに2度の調査で同じ結果であった。

- (4) さらに家庭環境（「家に50冊以上の本や地図などがあるか」）による「勉強（項目）」への影響と「たいてい朝ごはんを食べてから登校するか」と、「夕ご飯をたいてい家族と食べるかどうか」という点が、「家庭幸福」や「自尊心」にどう影響するか調べた。結果はすべて有意で、50冊以上本がある家庭の子どもは、50冊未満しか本などが家庭にない子どもたちより、勉強に対する満足度が有意に高かった。また、「朝ごはんをたいてい食べてから登校する生徒」として「夕ご飯をたいてい家族と食べる生徒」は、そうでない生徒より有意に「家庭」に関する満足度が高く、また、自尊感情も高かった。

本研究では主にアフリカ・アジアの中学生を対象に、自尊感情といじめの関係、そして家庭や学校地域の影響を検証し、いじめと自尊心が深く関連づけられていること、また、中学生の自尊心には「勉強（に自信を持てること）」や、「家庭」の影響、「友達」の影響が大きいことを、どの国でも明らかにした。また、いじめには、加害であろうと被害であろうと関わる子どもたちの自尊心が、関わらない子どもたちの自尊心より低いことも検証できた。今後は、自尊心が高いとどのような向社会的な影響があるか、など、国際比較をしながら考えたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

- 櫻井里穂（2014）「メキシコにおける非正規学校 正規学校への過渡的・限定的役割」『アジア教育研究報告』第13号 特集 p.62-70.

〔学会発表〕（計 6 件）

- Riho Sakurai (2016). Education Reforms in the 21st Century: Japan, Mexico and Turkey : Yutori Kyoiku and the Revised FLE: Effects on Lower Secondary Schools (Junior High Schools) in Japan”

Presented at the 60th Conference of the Comparative and International Education Society: (CIES) 2016. March 10. Vancouver, Canada.

- Riho Sakurai (2015). “What impacts student self-esteem? A case from Japanese middle schools –revisited” Presented at the International Council on Education for Teaching (ICET) 59th World Assembly Challenging disparities in Education. June 19. Naruto, JAPAN.
- Riho Sakurai. (2015). “School bullying, self-esteem and social capital: a case from lower secondary schools in a Japanese provincial city”. Presented at the 59th Annual Conference of the Comparative and International Education Society: (CIES) 2015, March 11. Washington D.C. USA.
- 櫻井里穂（2014）「子どもの自尊心から解くいじめ・学校教育への示唆」日本教育社会学会第66回大会 研究発表 2014年9月14日（於、松山大学）
- Riho Sakurai (2014). “What influences student self-esteem? Work, school bulling, friends, or family?: cases from urban Kenya, revisited.” Presented at the 58th Annual conference of the Comparative and International Education Society, March 11. Toronto, Canada.
- Riho Sakurai (2013). “Inclusive Education in Bhutan.” Presented at the Expert Meeting: Education Policy Research on Equity and Inclusion in Asia-Pacific –Focusing on Children with Disabilities-

September 20. Bangkok, Thailand.

〔図書〕(計 4 件)

- 櫻井里穂 (2016) 『「学校化」に向かう南アジア 教育と社会変容』押川文子・南出和余編著 コラム「ブータンの国民総幸福 (Gross National Happiness) 教育と特別支援教育」昭和堂 (p.146-149) [共著]
- 櫻井里穂 (2014) 『教育の質を目指す学校教育 二部制から一部制の方向へメキシコ』第4章 二宮 皓編著 『新版 世界の学校 教育制度から日常の学校風景まで』学事出版、(p.48-55) [共著]
- 櫻井里穂 (2014) 第21章 『幸福な国の学校 ブータン』、二宮 皓編著 『新版 世界の学校 教育制度から日常の学校風景まで』学事出版 (p.214-223). [共著]
- 櫻井里穂 (2014) 「第7章 ブータンにおけるインクルーシブ教育と教育の質 - GNH 教育と Equity (公正さ) の観点から - 」p.82-91. 黒田一雄 『インクルーシブ教育の質向上に資するユネスコおよび教育省担当官能力開発事業』 早稲田大学 日米教育研究機構 国際教育協力研究所

〔産業財産権〕
該当なし

〔その他〕

- 2015年9月15日 科学研究の助成を受けている研究「朝食摂る子、高い自尊心」として本研究が中国新聞に紹介された。[30面]



6. 研究組織

(1) 研究代表者

櫻井 里穂 (Sakurai, Riho)

広島大学・教育開発国際協力研究センター・
准教授

研究者番号：50509354

(2) 研究分担者

該当なし

(3) 連携研究者

該当なし